

(開始時刻 18 時 00 分)

○大西座長 それでは、ただいまより第3回「フロンティア分科会」を開催させていただきます。

本時は、栗栖委員が御欠席ということであります。

まず、総理に御出席をいただいておりますので、ごあいさつをちょうだいしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○野田総理大臣 本日は御多忙のところ、御出席いただきまして、感謝を申し上げます。

これまで4つの部会におかれましては、大変ハイペースで精力的に御議論をいただいていることを改めて御礼を申し上げたいと思います。

また、先週の日曜日はそれぞれの部会長あるいは部会長代理の皆様と意見交換をさせていただきました。約1時間半ほどでございましたけれども、大変有意義な意見交換ができたと思います。

今の日本の現状に甘んじてしまえば、この国はジリ貧に陥ってしまいます。この国の将来を思えば、先を見通してフロンティアを開発し、未来を切り開いていく必要があります。特に先般の懇談会で強調させていただきましたが、日本がフロントランナーとして世界のモデルとなり、国際的なルールメイキングにイニシアティブを取っていくことなどを通じて、もう一度、日本が元気になるためのビジョンを是非とも御提示をいただきたいと考えております。

本日は5月目途の中間報告とりまとめに向けまして、各部会の論点整理を踏まえて、中間報告においてアピールすべきメッセージなどについて、活発な意見交換を期待しております。どうぞよろしくお願いいたします。

(報道関係者退室)

○大西座長 ありがとうございます。総理はここで御退席されます。今日はお忙しいところを御出席いただき、ありがとうございます。

(野田総理大臣退室)

○大西座長 先ほど総理からお話があったように、ルールを日本発でつくっていく。ルールのとらえ方はさまざまだと思いますが、要するに世界に向けて知恵を発信しろということと同時に、それがある程度世界でインパクトを与えるような戦略もあり得るのではないかと思います。

それらも踏まえつつ、今日には各部会の論点について、御用意いただいた資料を基に報告をしていただき、中間報告に向けて少し議論の集約を図りたいと思います。その際、もし可能であれば、それぞれの部会でこういうテーマをセールスポイントとして強調したいということなども御披露いただくと、全体のまとめをするときのめり張りを付けやすくなりますので、この部会ではこの辺を強調したいということを一言おっしゃっていただくとありがたいと思います。

繁栄、幸福、叡智、平和の順番で御報告をいただきたいと思います。

繁栄のフロンティア部会からよろしくお願いたします。

○柳川委員 それでは、お手元の資料1「繁栄のフロンティア部会 論点整理メモ」に基づきまして、簡単にお話をさせていただこうと思います。

全部お話しすると5分を過ぎてしまいますので、かいつまんでお話をさせていただこうと思います。

このままで進んだ場合の2050年ということだと、先ほど総理のお話からありましたように、現状維持すらもできなくなる。特に我々が気にしておりますのは、将来の人口減少です。いわゆる生産年齢人口は、2060年に半減して4,000万人くらいになるという中では、成長をマイナスではなくてゼロに持っていくにしてもなかなか大変だということで、繁栄に際しては、その大きな人口減少の状況を打ち破るべく、大きなブレークスルーをしなければいけない。

「あるべき2050年の姿」ということだと、未来世代、2050年は我々の次の新しく生まれてくる世代の年ですけれども、大きく分けると2つポイントがあります。それまでの負担やしがらみによって活動が縛られないことと、環境の変化に応じて柔軟に能力開発ができるということでございます。

具体的には、社会保障が世代間の所得移転を中心にしていきますと、どうしても将来の少なくなった人口の世代に負担が回るということですので、世代内で所得移転をできるだけやっていく。

もう一つ、全体にも関わる話で我々のところで重要視しておりますのは、いわゆる再教育です。どんな世代であっても新しい能力を得る機会が与えられているということが、先ほど申し上げた環境変化に応じて柔軟に能力開発ができるためには不可欠だろうと。

そうしますと、一生を一つの会社で過ごすというのがいわゆる正規ではなくて、これは一つの例示ですけれども、20~40歳、40~60歳、60~75歳と3つくらいの機会に分けたときに、それぞれに合った働き場所がある。場所を変えていけるようなことをしていけないといけないのではないかと。

さらに、世界中からのヒト、モノ、カネが我が国へ集まってくる。そういう魅力のある地域をつくるということで、具体的には高齢化、環境、資源エネルギー制約であるとか、前回出てきたような世界の課題を解決できる体制に持っていくことです。

大きく分けると、今のようなことを実現するための大胆な政策と、比較的足下に近いところで何をやっていくかということに分けて考えているのですが、将来的には2050年までに切り開くべき領域ということだと、先ほど申し上げたような、ツケを回さないための財政再建、あるいは社会保障給付の削減という話。

もう一つは、75歳くらいまで、現状の働き場所でそのまま居続けるというよりは、どちらかという新しい働き場所を積極的に得て、元気に支える側に回っていけるような状況ができるだけつくっていくことが大事だろう。

それから、先ほどの再教育の仕組み。グローバルな人材の積極的な受入れのため、ヒト、

モノ、カネを引き付けるということが大事なことだろう。

ボトルネックはその裏返しですので、省略いたします。

2 ページの「これからの基本原則」ということですが、キャッチフレーズ的にいきますと、「未来を搾取する社会から、未来に投資する社会へ」ということで、新陳代謝の促進や、世代間ではなく世代内の所得分配。新陳代謝を促進する上では、柔軟な雇用ルール、再教育システムや、そういうものを実現させるためのマインドセットの変革ということがございます。具体的には繰り返しになりますので申し上げますが、75 歳まで元気に働ける、財政再建ということです。

このように人材の戦略を国家戦略にして、今いる人材を積極的に再活性化して、よりよく働けるようにするということと、国際的なルールメイキングに貢献するために国際的に通用する人材をつくり出すこと、国際的に活躍できる人材を積極的に呼び込むことという3つが大きなポイントになると思っております。

国際的に活躍できる人材という意味では、多言語化、多文化への適応力を早い段階から身に付けるということで、中学生とか高校生の段階から留学生を増やして、内なる国際化を目指すことが一つの政策的な方向性かと思っております。

具体的な政策は幾つか出ておりますけれども、先ほどのような柔軟な働き方ということであると、少し大胆な政策としては、40 歳あるいは 55 歳定年ということで、40 歳で定年であれば、当然また別のところで働くことも考えるわけですが、こういう政策や、いわゆるフルタイムでない正規労働の拡充を進めていくことが女性の活躍、仕事や家庭の両立を支援していく上では重要だろうと。この辺りは他の部会とも関係すると思っております。

具体的に、世界の課題を日本が解決するという意味では、先ほど総理からお話があった、国際的なルールメイキングを積極的に進める。そのための人的ネットワークや人材の育成が重要だと考えています。

現実的な対策としては、新陳代謝を活発にするという意味では、大幅な規制緩和を行って、世界的に貢献できる産業を創出するという戦略的なフロンティア特区のようなものをつくって支援をしていくということが一つの方策としては考えられるのではないかと。いわゆる内需型と呼ばれている産業、あるいは医療や介護など、社会保障の分野での産業も、世界的な貢献という観点から、日本のシステムを世界に通用する、場合によってはシステム的な輸出産業に持っていくことができるのではないかと。そうすることで、その産業の活性化と国際化、生産性の向上によって分厚い中間層をつくるということができるだろうと思っております。

その他に幾つか、かなり具体的な政策が部会では紹介されて議論されていますが、その点に関しては、また議論の際に紹介させていただきたいと思っております。

○大西座長 ありがとうございました。

それでは、次に幸福のフロンティア部会、お願いいたします。

○阿部委員 幸福部会では、まずは2050年のあるべき姿を固めるところを、作業中です。

まず3ページをご覧ください。幸福の姿をどういうものにするべきかというところから議論を始めています。そこにあります経済社会状況、心身の健康、関係性というのは内閣府の国民生活選好度調査の中での幸福感の規定要因として挙げられたものです。この下に幾つか細かい分類もあるのですが、これをピックアップして、幸福部会では2050年の幸福の姿で、3つの基準が必要であると思っております。

1つ目が、基本的ウェル・ビーイングの保障、2つ目が関係性の保障、3つ目がそれらを持続可能とする持続可能性の向上です。

4ページの図は、この3つの軸を基に、どのような方向になっていくかということを図式化したものです。横軸にウェル・ビーイングの保障として、例えば衣食住など基礎ニーズの充足や貧困削減が書いてあり、関係性の保障では役割、居場所、出番の保障が書いてあります。

その中間のライフスタイルのイノベーションというのは、これらを可能とするツール、手法として挙げられるもので、疑似家族や両立支援テクノロジー、残業の解消といった項目を挙げております。

1ページめくっていただきますと、基本的ニーズはここに挙げております。今、生活に困っている人はそれほど多くないので、このニーズをわざわざ描く必要がないのではないかとと思われる方もいるかもしれませんが、日本の貧困率が16%ということも踏まえて、今後、上がっていく可能性もありますし、これからは食や水というものが簡単に手に入らなくなってくる可能性も考え、このニーズの充足を改めてここで書く必要があると思っております。

それと同時に貧困の削減、機会の平等、格差の縮小を挙げております。また、人権としての保障として、すべての人に人権としての基本的ニーズの保障をあえて追加で書くべきではないかと考えています。これは社会的包摂という観点から、障害を持つ方や高齢の方々、外国人の方々も踏まえて、すべての方々に基本的ニーズを保障するということを基軸として置いております。

2つ目の基軸は、関係性の保障で、すべての人に居場所と絆が得られる状況にするべきだ書いております。今までは閉ざされた血縁による家族が居場所と絆のほとんどを日本の中で供給してきましたが、今後、単身世帯が増える、子どもがいない世帯や家族等がいない方々が増えるという可能性も踏まえまして、より緩やかな家族として、疑似家族という言葉は語弊があるかもしれませんが、誰もがアクセスできるより広い共有の場をつくっていく必要があるのではないかと考えております。

例えば単身世帯が増えていく中で、一人で家で御飯を食べる人が増えるのではなくて、みんなで食べられるような場所をもっとつくっていくことを具体的に考えています。

3つ目がこれらを可能にするためのライフスタイルのイノベーション。先ほど、繁栄部会でも挙がりましたが、働き方の改革が必要だと考えています。具体的には、2050年にな

れば、正規、非正規といったような就労形態による身分の2分が解消されており、基本的に賃金や待遇が平等になった上ですべての国民が時間、日数、場所にとらわれないフレキシブルな働き方が可能になるということを考えております。簡単に言えば、全国民の非正規化と思っておりまして、ただ、悪い意味での非正規ではなく、みんな自由に働けるという意味での非正規です。これらを可能にするIT技術の推進も必要だと思っております。

長時間労働というのが日本の中で大きなネックとなっておりますので、この解消も必要だということです。

女性も同じように働けるということを考えますと、このごろは男性も非常に大きなウェイトを持って負担になっている方も多いですけれども、子育て、介護、を両立するテクノロジーやシステムの開発が必要だと考えています。単純に介護テクノロジーとか家事テクノロジーという技術的なものもありますし、例えば先ほど申し上げましたような、みんなですべてを簡単にとることができるような外食産業、食事の宅配サービスもろもろを含めたものということです。

最後に社会の持続可能性について、本気の少子化対策が必要だと私たちは考えています。勿論、環境問題、食料や水やエネルギーも含めて、自給率の向上と地球規模での解決に日本が貢献していくことが必要だと考えております。

また、今回資料ではつくっていませんが、持続可能性の大きなところに教育改革が入ってきます。これも先ほどの繁栄部会と非常に重なる部分があるかと思いますが、再教育やフレキシブルな教育を可能とし、リーダーシップや国際性を発揮できるような人材を育てていく教育が必要ではないかと思っております。

特に今、具体的な政策としてここで挙げられているのが、教員養成課程の見直しです。まず、先生を変えるところからやっていかなければいけないということで、これはすぐにでも着手できるのではないかと思っております。

議論の中では体験格差、例えば山登りをするとか昆虫を捕まえるといったことでも、既に体験格差が起こってきている中で、これらを解消するためにいろいろな形態のいろいろな方々が教員として、公教育の中に入っていく必要がある。これらの教育は比較的到低学年のときには、皆さんが積極的ですけれども、小学校の高学年になってくると、勉強が中心になってきて、みんなすべてやめてしまうという状況にありますので、ネックとなっているのは大学入試ではないかと考えており、大学入試の改革の必要があるのではないかと議論をしております。

幸福部会からは、以上です。

○大西座長 どうもありがとうございました。

それでは、次に叡智のフロンティア部会、お願いいたします。

○荻部委員 資料3をご覧ください。叡智のフロンティア部会に関しては、例えば今日の資料3の「1 知識・文化の現状の問題点」において、現在の問題を挙げてきたわけですが、叡智のフロンティア部会で現状の問題点として議論されたことは、ほとんど幸福・繁

栄と重なります。ですから、この叡智の中間報告のまとめとしては、このまま行ったら 2050 年にどうなるかというところは省略してしまって、むしろ議論されたものの中から 2050 年までに目指すべき目標とその他の 2025 年に何ができるのか。その 2 本立てのくらいで考えた方が適切だろうと現状では判断をしています。

今日の資料は 5 点で論点整理をしているのですが、最も重要なのは「5 未来世代の希望にむけて」、どういう知恵を育てるのか。叡智とは何なのか。部会で出た議論、前回の懇談会で出た議論を参考にしてみますと、例えば物事を高みからとらえ直す能力、自己更新する開かれた心、表現力、創造力、編集力、予想外のことに対処できる判断力、そのようなものが挙がっています。

私自身は前回のまとめ方ですと 3 つの言葉でして、交流、編集、度量。さまざまにもっと開かれて交流していくことと、さまざまに異なった知恵を組み合わせしていくこと、それから、度量、つまり自分と異質なものを受け入れること。その 3 つのことをポイントに考えていったらいいのではないかと思います。

そこで重要になりますのが「2 知識と文化を担う人材」をどういうふうに育てるか。先ほどのお話の中でも、少子化の中でむしろ一人ひとりの人材をしっかり育てることが大事になってくる。そのポイントとして重要なことは何かということにあるわけです。一つの組織・業界に一生とらわれるのではなくて、その間の流動性を促進する。あるいは海外との人材交流を盛んにする。そういうことによって、変化と失敗に対応する対応力ができるのではないかと。

デジタル教育環境の整備をすることを通じて、例えば先進的にデジタル機器を教育に使うようなところを幾つか、一種の特区のような形で指定していくというようなプランも具体的に出てきたわけですが、そういうデジタル技術を使うことによって、今、言った多様なものに対応していく柔軟な思考力が育てられる側面があると思います。そうした形で考えていきたい。

そして、単に頭の知だけではなく、身体知、体全体で物事を表現するような知の在り方を育てていくことも重要です。

また、編集する力という言葉がこの部会では何人かの方から出たのですが、つなぐ才能ですね。異分野間の交流、行政と民間、中央と地方、あるいは日本文化と異文化、そうしたものをつなぐ力といったことを重点的に考えていったらいいのではないかと。その上で 3 番、4 番が大事になるわけでありませう。

3 番は幾つか挙げていますが、簡単に言うと、社会的包摂、多様性の保障。これは先ほどの幸福部会の話と重なります。

情報通信技術の発展に対応した速度と流動性を拡大していくことを通じて集合知、いろいろな知恵を組み合わせたいけるような枠組みを整備していく。

「4 知識・文化と、市場との関係」にいけますと、先ほどルール形成ということが言われましたが、日本のこれまで培っていたものを踏まえながら、新しい状況に対応する。

そうした形で世界に輸出できるような標準をつくっていく。そのために例えば知的財産の活用のための規制を解除していくこと。地方の多様性を育てていく。地元の発意と総意を引き出す。あるいは地域間の情報交流を進めることによって、独自のブランドが新しく日本の中に幾つも出てきて、それがまた海外に発信していく一つの資源になっていく。そんなような形が考えられるのではないかと議論をしております。

叡智部会からは、以上です。

○大西座長 ありがとうございます。

それでは、最後になりますけれども、平和のフロンティア部会から御報告をお願いします。

○中西委員 実際に書くことを考えると、いただいた構成を変えた方が書きやすいと思っ
て変えてみました。これまでの3部会でお話になっていることとかなり重なるのですが、
特に国際関係とのつながりで幾つかのポイントを御紹介したいと思います。

平和部会の場合、2050年というときに、日本だけの話ではできなくて、世界のことをあ
る程度考えないといけないのですが、今のところは2050年の世界がどうなっているかは正
直、皆目わからない。いろいろな可能性があるということ以上に、踏み込んで議論をする
ことはあまり意味がないだろうと考えております。

どのような世界になるにしても、日本の国際的な関係で最も重要なのは、日本の国力が
どうなっているかということで、過去20年くらい日本はギリ貧だったのですが、このまま
行くとこのギリ貧がもっと急速に進行していき、国際政治上、不利な状況に置かれる。場
合によっては国家の安全保障も危険に瀕する可能性があるということで、比較的意見が一
致していると思います。

望ましい姿として、先ほど総理からも御紹介がりましたが、日本の国力をできるだけ
高めると同時に、その国力の中に国際的に敬意を持たれる、肯定的に評価される日本外交
の伝統や日本人の性質というものを生かしながら、国際公共財やルールなどを提供する。
それによって間接的に日本の安全保障も高めていくという姿が望ましいであろうという、
その辺りまではほぼコンセンサスがあると言えるのではないかと思います。

それを実現するための基本原則として、日本の国力はアメリカとか中国とか、あるいは
その他の国と比べてもハードの部分では限定されているので、ソフトの部分も含めて、持
てる国力を総合的に活用する知恵を使って、そうした力を組み合わせるといったことが必要
になるであろうと考えております。

ですから、平和主義の原則は維持しつつ、より能動的な世界の平和に貢献するという姿
勢を強めるであるとか、あるいは人材を育成して、従来、日本の戦後教育はとりわけ平均
点主義で全体の底上げをするということを重視してきたが、これからの世界の中の日本と
いうことを考えたときに、国際秩序を活用できる人材は戦略的にある程度セレクトティブに、
勿論、留学生も含めて、育成していく必要があるのではないかと考えております。

ボトルネックについては、基本的に裏返しですので省略をします。

政策のフロンティアはまだ集約が十分ではなくて、今後、部会内でも議論があると思いますが、やはり一般論ではなくて、できるだけ具体的な踏み込んだ議論をしたいということが総意としてはあります。何人かの委員はとりわけ日本の安全保障、防衛力の維持整備というのが重要であるという観点から、例えば集団的自衛権の行使については、明示的に表現をすべきだということを言っております。

また、人間の安全保障とか平和構築、国際災害協力といった分野で日本の強みはあるので、この部分を今後とも生かすべきであるという意見もかなり広く支持を得ています。また、中国を始めとするアジア諸国との間で、地域的な共同体であるとか、統合であるとか、そういったものを長期的な目標として掲げるべきであると言っておられる委員の方もおられて、この辺は多少、今後集約を図る必要があるテーマではないかと思えます。

そのほかに戦略的な意思決定を行える国家体制の構築という、従来からずっと言われてきていることですが、そろそろ形をしっかりとつくりたいと間に合わなくなる。NSC 等の話もありますし、日本の場合には特に国際的に活動できるシンクタンクが非常に弱いということは明白な弱点でありまして、とりわけ各省庁が持っているシンクタンク機能のようものをより有効に使えるような制度的な変革を必要とするという意見もあります。

そのほかに下の方ですけれども、例えば TPP の問題について、この中間報告でどれくらい扱うかは議論があるところだと思いますが、基本的に平和部会では国際分業に従って、経済構造の大胆な改革なしには、日本の国力はこのまま衰退していくという観点が強いものでありまして、そういう意味では国際的な開放ということをより重視しているということがあろうかと思えます。

飛び飛びで恐縮ですけれども、まだあまりキャッチフレーズについて十分考えておりませんので、今後いいものを考えていきたいと思っております。

以上です。

○大西座長 ありがとうございます。

私と事務局長からもメモが出ていますので、それを説明した後に意見交換にさせていただきたいと思えます。

資料5が私の資料です。これは前回のフロンティア分科会でもまとめたものをお出しして、それをバージョンアップしたということに尽きるわけですが、それぞれの部会での議論を一覧表にすると、こんな感じだと考えております。特に前回申し上げましたが、一番左の表側に並んでいるキーワード。これが全体を通じて底流を流れるような概念になっており、これを選ぶところが一つまとめのポイントになるのかなと思えます。

一番上に「国際化が進む」と書きました。これはいろいろな部会で、やはり人口が減っていく中で国際化が必要だと。あるいはアジアに中心が移っていく中で、日本のアジアにおける役割は重要だと。いろいろな格好で国際化ということが議論をされたと思えます。ただ、どちらかというところ、日本が出ていく。あるいはあるレベル以上、意思決定、政策決定あるいは研究開発、そういう部門での国際交流というのが能動的に語られている一方で、

移民政策をどういうふうに考えていくのか。ここについては、まだ共通点がないのかもしれない。この辺も少し議論をしていく必要があるのかなという気がします。

否定的なとらえ方としては、このままいくと日本が知的ガラパゴス化、孤立化してしまうおそれがあるので、国際化が極めて重要です。

2つ目の、若い世代が活躍すべきだということがいろいろな格好で語られたと思います。40歳あるいはもうちょっと上くらいで一区切りを付けて、もう一回人生を歩むということで、若い世代が大きな重しである高齢世代につぶされない環境をつくるということが重要だということでもあります。これも繁栄部会で出てきていますし、幸福部会でもとらえ方は少し視点が違うかもしれませんが出てきています。

3つ目がそれとも関連しますが、流動性あるいは場所、時間にとらわれない多様な社会。この概念はなかなか難しいところではありますが、そういう議論もいろいろな格好で出されてきております。社会的な包摂という観点で、いろいろな状態に置かれている人が社会に参画でき、可能性を追求できるという多様性を重んずる社会。そういうことの一つの底流として、強調されているのではないかと。

一方で最後ですが、日本の個性。日本の役割は何かということを考えていくべきだと。総理の言葉ではルールメイキングとありましたけれども、かなり高いレベルでの日本の役割にも期待をかける必要があるということかもしれません。

左に書いてあるのが1つのキーワードかなと考えております。フロンティア分科会は世代間をいろいろな組み合わせで構成された若い人から構成されて、あえて言うとも我々が育ってきた間隔と皆さんの発表は少し違うんです。我々はどちらかと言うと、競争社会で過ごしてきたという感じで、同世代がものすごく多いので、絆をあえて求めるというよりは、いかにして競争して勝っていくかということが少し優先されてきたのかなと。

たまたま我々の上の世代は戦争体験世代ですから、我々が小学校とか中学校とか大学のころの親の世代、少し上の世代は自信を失っていた世代でもあります。そういうこともあって、わりと自由なことができたし、かつ大勢の同世代がいたので競争社会だった。皆さんの口から絆とか、若い世代にチャンスを与える仕組みとかいうのが出てくるのは、背景はよくわかりますが、我々が使ってきた言葉とは少し違うので、うまくその辺をミックスしていくことができると、新しい時代にも対応できるのかと。

つまり、我々が育ってきたような社会にいる国も周りにあるわけです。日本のポジションというか、国の構成とアジアの大国になってくる国の構成とはまた違うので、そういった国の事情を理解することも、私を見てそれが理解できるかどうかわかりませんが、必要なのかなと思いました。

それでは、事務局長からも御報告をいただきたいと思います。

○永久事務局長 中間報告のアウトラインを考えてきました。

総論、各論とも大体1万字、A4で1,000字として10枚程度というお話でございまして、「である」調で統一をした方がいいのかなと思っています。

構成ですけれども、極めてオーソドックスな形を考えております。まず最初に座長のごあいさつがあって、総論の中身が続いている形ですけれども、①中長期ビジョンの必要性や②フロンティア分科会の説明、③バックキャストिंगという方法論について、これは座長にお書きいただけると伺っています。

④から大体⑨については資料6のようなマトリクスをつくっておりますが、各部会でお願しているものが縦に並んでいます、共通点を探しながら、すべて横で議論をしてみようかなと考えています。

⑧基本原則のところは、座長がつくっていただいた資料5辺りが、この基本原則にはめ込むことができるのではないかと考えております。

⑩中長期ビジョンを実現する条件で、これはボトルネックと重なってしまっておりますので、ボトルネックを削って、ここに特出ししようかなとも思っていますが、各部会で共通で出てきている話題として、財政、政治、特に意思決定の問題、国民全体のマインドセットの問題、その辺りを特出しして、横の軸で書いていったらどうかと考えています。

総論が終わりまして、次は各論になるわけですけれども、1～4と今、発表の御順番で構成していこうかなとも思っているのですが、お話を伺っていると、叡智を最後にした方がいいのではないかという気もしております。この辺は御意見をいただけたらと考えています。

各部会は原則として同じ順番でいろいろと構成をお願いしていましたが、難しいこともあると思いますので、順番はあえてこだわらなくても結構でございますということと、叡智の部会のお話を伺っていますと、重なっている部分も相当ありますので、その部分が省略されていてもいいのではないかと今は考えております。

各論の①をご覧いただきたいと思います。現在形で表現するか、未来形で表現するか。未来形で表現するよりも現在形で2050年の形を書いた方がすごくリアルな感じがしますが、皆さん、どうでしょうか。こういう感じで、現在形で2050年を表現してみるというようなこと。それぞれ御自由にお書きいただいても構わないのですが、こうした形で書くと、より新鮮に感じる気がするので、やっていただけたらどうかということ御意見をいただきたいと思っています。

「Ⅲ. フロンティア特区構想の提案」を考えてみました。今のお話で、繁栄部会でも叡智部会でもありましたけれども、これを実現させるための何か特別な場所、実験場みたいなものが必要ではないかということで、こうした特区といたしましても手あかが付いたような感じで、うまくいっていない特区も相当あるので、特区という名前を使うかどうかは別問題として、こうした実験場みたいなものをつくったらどうかということを書いてみたいと思っています。

とりわけ環境未来都市構想が既にございまして、これは11の市町村が出ているわけです。仮ですけれども、これはまだ具体的にそんなに進んでいないという説明を受けましたが、このフロンティアを実験的にやってみる、さまざまな政策を実験的にやってみる。全部が

できるというわけではないと思いますけれども、そうした一つの実験業として位置づけたらどうかと思っています。これが1つのモデルとして、そこでやっている政策をパッケージで海外に提起をしていくというようなことも可能ではないかと思っています。この辺りは皆様に御議論をいただけたらなと思っています。

以上です。

○大西座長 どうもありがとうございました。用意した報告は以上です。皆さんで部会をこなしながら、まとめていただくということで、その先が見えてくるということになるので、かなり今日は重要な日ということになります。少し実務的な話も踏み込んでやっていきたいと思っています。

それでは、後は自由に意見交換をするということになりますので、よろしくお願ひします。古川大臣、大串政務官もお見えでございますし、座長代理もいらしていますし、国家戦略会議の岩田委員も参加されておりますので、いろいろな角度から意見交換をしていただきます。

○柳川委員 今の事務局長からの御提案に関してです。細かいところから言いますと、先ほど総論のところにもお話があったように、ボトルネックと基本原則とか2025年までに切り開くべき領域の辺りが重なる部分が多いので、この辺りはどちらかに吸収させていただくようなことで対処させていただければと思います。

現在形バージョンで書くとインパクトがあっというかなとは思いますが、そのためには2050年の現在をある程度決め打ちをして、こういう社会になっているということを前提に書かなければいけないと思います。

これは分野によると思いますが、特に繁栄、あるいは平和もそうかもしれませんが、幾つかの可能性があって、それぞれに対して我々がどう対処していくかを考えていると。どちらかという、将来2050年にいろいろな可能性があるけれども、いろいろな可能性が起きても対処できるというような柔軟な人材開発とか、こういうことを考えているとすると、シナリオを4つも5つも書けるのであれば、この辺も書けるけれども、1つに決め打ちしてしまうと、こういう世界だけを想定しているのかととらえられがちで、その辺りは書き方が難しくなってしまうのかなと思っています。

フロンティア特区構想は繁栄の部会でもこのように書かせていただいているので、こういうので全体がまとまればいいかなと思います。ただ、そのためには、ここまで書いたら、これを実現させたいと思うので、やはり実現に向けたプロセスであったり、どこをどう詰めた特区にするかを、この中間報告でなくてもいいと思いますが、最終報告ではきちんとやりたい。そのためには、これはどこかの部会でばらばらにやっていいのかどうかという辺りも含めて、詳細をどこで詰めるのかということを考えていただければと思います。

○大西座長 どうぞ。

○上村委員 未来形で書くと、「何々だろう」、「思われる」というようなぼやかした表現しかできないので、インパクトがない表現の繰り返しになってしまい非常に書きにくいです。

確かに柳川委員が言われるように、現在形の方がイメージをして決め打ちをするところがあるのですが、ある程度は最悪のシナリオを想定して、こういう可能性があるよということを脚注で説明をするなりすれば、インパクトのある表現にできるのかなと思います。「2050年〇月×日」は書くかどうかは置いておいて、とにかく現在形で書いた方が、書き方としては非常に楽だということです。

○隠岐委員 今のところについて、私自身はどちらのスタイルでもいいかなと思ったのですが、分野によって非常に分岐しているようなシナリオがある、またはいろいろなバージョンがありそうなので、共通のところを何かつくっておいて、ほかに例えば何々の部会はこういうシナリオがあるという形で、分けた方が作業としては楽なのではないかと思ったので、発言させていただきました。

以上です。

○大西座長 今の御意見は、それぞれの部会のところは普通に書いて、共通部分を何か、未来の社会を現実に引き付けたようなタッチで表現するという感じですか。

○隠岐委員 例えば、『沈黙の春』という環境問題の本があるのですが、最初が寓話の形で始まって、本当にあったかのように、ある環境破壊された村の話があって、その後に本当に科学的な内容になります。共通部分には、例えばそういう部分もつくって、そのあと各部会のシナリオというふうにと書きやすいような気がしたという思い付きです。

○大西座長 使い分けるといえることですね。どうぞ。

○阿部委員 現在形バージョンかどうかというのは、各論の中間報告の話であって、総論の話ではないということですね。

○永久事務局長 そうです。今のところは総論の部分では考えていませんけれども、総論のところでは未来形で、それぞれの部会が描かれたようなところを書いていきたいと思っています。

○阿部委員 各論のところでは全部の部会がそろわなければいけないということはないのではないかと思います。

○大西座長 どうぞ。

○委員 平和部会はまだ書いておりませんので、わからないのですが、特に最悪シナリオを平和部会で書けると言われると大分最悪になってしまうので、どここの国と戦争をして負けているとか、どここの領土がなくなっているとか、日本の政府が占領状態にあるとか、そういうことも考えられないわけではないので、そういうものを書くのはちょっと難しいなと思いますから、この辺りは部会ごとに差を付けさせていただければと思います。

それと関連して、実際にこれをつくっていったときに、総論で総括されているところと各論等のバランス、同じことの繰り返しになってしまうかというところが気になっていて、2050年のシナリオも4つ各部会で書かれていると、4つ並べてみると暗い話の繰り返しになりかねないので、その辺りの調整も考えていただいた方がいいのではないかと思います。

います。

○大西座長 今の点はどうですか。

○永久事務局長 皆さんの各部会の案が上がってこない、具体的にどうするかというイメージは湧いてこないのですが、重複させるというよりも、むしろ共通性を出していくようなイメージで考えていて、なるべく重複感がないような形で表現ができればと思っています。

今、思ったことですが、例えば各部会で2050年のいろいろなシナリオを考えられるとして、総論のところを物語風で書いてしまう。それがいいかどうかは別でありますけれども、最悪のシナリオは合わせると、こうなってしまうみたいなことを描くことも可能ではありません。

○中西委員 今、思い付いたのですが、総論のところは各部会のフォーマットを合わせて書くと非常に重なってしまう。各部会は多少手直しをすると思うのですが、むしろ総論でいろいろと工夫していただいて、4つの部会のロジックを結び付ける。例えば繁栄から始まって、幸福、平和、叡智の4つがいかにか有機的につながっているかというシナリオで書いていただいた方が各論との差異化はできるのではないかという気がしました。

○永久事務局長 おっしゃるとおりで、まだ書いていないので何とも言えなくて、書き始めたら、こういうものは結構ぐちゃぐちゃになるものですが、ストーリーを展開していった描きたいなと思っています。その順番でいくと、例えば国際環境からどうなっていくかと書き始めていくこともできてしまうので、その辺りはもうちょっと時間をいただいて、各部会の案が出てきてからの勝負になってしまうので、実質2～3日の勝負ですが、工夫したいなと思います。ありがとうございます。

○大西座長 部会ごとの書き方は、部会の取り扱うテーマによって違うと思います。幸福は抽象化された概念だろうし、形而上学的な部分を含んでいるので、タッチとして言えば寓話からスタートするというか、寓話的タッチで描くこともできるけれども、割と即物的と言うと語弊があるけれども、サブスタンスがある領域は、それを書いてしまうとひとり歩きをしてしまうところもあるので、神経をそれ自体に使わざるを得ないと思います。

そこはうまくこういうタッチで書いているということが読者に伝わることは最低限必要だと思いますが、お任せして、一回つくってみるということかなと思います。

○柳川委員 今、座長からお話があったように、ある意味で実は同じテーマを違う性質の角度から見ているという性質で部会が分かれていますので、それは全体の話は総論でコネクションをうまくストーリーとしてつくっていただいて、むしろ部会はある意味で部会自体の特徴が出るような書きぶりの方が、それぞれの部会が分かれている理由があるのではないかという気がします。そうではないと、極端なことを言うと、みんな同じメッセージなので、同じ話になってしまうと思います。むしろ書きぶりみたいところで、ある意味で特徴が出るかなと。

そういう意味ですと、繁栄の部会が一番即物的なところですので、このまま進んだ場合

の2050年の経済環境、繁栄状況を詳細に記述するところは、あまり我々はウェイトを置くつもりはないです。そこでいかに経済が悲惨かという話を報告書としてこと細かにリアリティを持って書くことにウェイトを置くのではなくて、むしろいかに何かをやって、いい方向に持っていけるかという、その具体論のところ、ある意味で部会としての報告書の特徴が出るのではないかと思いますので、ここであまりリアリティのある繁栄していない2050年を書いても、そこですごく面白いものになりましたと言っても、それは我々に課された使命ではないだろうと。そこは部会によって随分違うのだろうと思います。

○大西座長 どうぞ。

○阿部委員 おっしゃることは非常に私も同意するところがあるんですけども、これはたまたま延長線上の2050年の姿が一番上の項目だったので、ここから始まっているのですが、あるべき2050年の姿も勿論このような口調で書きたいなと幸福部会では思っています。おそらくどの部会もあるべき2050年の姿から議論を始めるという想定でやっていますので、あるべき2050年の絵というものはあると思います。それはどの部会も共通しているはずで、そこはあまり違うやり方でやるのもいかなものかという気がします。

○大西座長 ベースは未来のことだから、おそらく共通して書くとすれば、未来形で書くのがベースだと思います。こういう趣向を凝らすというのは一つのやり方で、趣向を凝らしているんだということが読む人にわかるように書いていただくと、混乱が少ないと思います。このパートに来ると、それも光るのではないかと思います。全体で未来と現在がごっちゃになっているのではないかと読み手に思われると、ややこしいことになる。そこはうまく書いていただくと、こういうタッチが効果を上げると思います。

○永久事務局長 あるべき姿の方はわりと決まってきたのではないかという印象があるのですが、いかがでしょうか。一つのコンセプトがクリアに出ると、各部会がそれぞれ違って全然かまわないと思いますが、そういう感じで想定するというよりも、こうあってほしいという絵なので。

○大西座長 あってほしいと書けば、未来の話ですね。こうなっているんだと書くと、今そうだという未来に立ってしまっているわけです。それは趣向を凝らした表現ということだと思います。

○永久事務局長 目標の話ですからね。

○柳川委員 現在形で書くほかに、具体的にビビッドに書く部分と、両方のポイントがあると思います。あるべき姿も部会によって、かなり抽象度の高いあるべき姿が提言できるものと、ビビッドに具体的にどうなってああってということを書けた方がリアリティがあっていいのだと思いますが、あるべき姿であってほしい姿も実は幾つかの可能性はある。むしろそういう多様な可能性があるということを前提に、我々は今どうするかを考えると、ここに一つのポイントがあるのだとすると、そこを決め打ちでビビッドにするのはなかなか難しい。

ただ、こういう社会になってほしいというのを、こういう社会になっていると、言葉の

最後を変えること自体はさほど難しいことではないと思いますので、2050年の我々の目指す姿というときに、こうなっている、ああなっていると、最後の言い方を統一することは難しくありません。

○大西座長 そこはある意味、少し先の作業でもいいですね。こういうタッチもあり得るということをお含みおきいただいて、それぞれ一番ぴったりだと思われる表現で書いていただくというくらいの合意で最初はいいのかなと思います。

ほかの点でも結構ですので、どうぞ。

○中西委員 1つは今、永久さんから出しているフロンティア特区という話があって、繁栄、叡智でも教育の範囲では、こういうテーマが割とぴったりくると思いますが、報告を伺っている限りでは、差を付けずにと言うと語弊があるのですが、全体としてすべての人が幸福を感じられるという観点で、特区は御趣旨と違っているのかなという気がしたのですが、その点がどうなのだろうかというのが一つ感じました。

もう一つは、叡智部会の報告をお伺いしていて、平和部会とある程度重なるのは、道徳とか倫理とか、そういう問題が平和の方では実は問題になっていて、日本が従来は経済がいいとか、技術がすべてとか、そういうことだったんですけれども、今後は敬意を持たれる国。とりわけルールというものをしっかり守って行って、ときには強い態度も取るという意味で、国際的に敬意を持たれるというようなことが重要だという話があって、それは結局、日本人の道徳観や倫理観が国際的にいかに通用するかということと重なってくるのではないかと思うので、その辺りのところで日本人の持っている倫理観はどういうものかということや少し触れていただくと平仄が取れるかなと思ったのですが、その辺りはいかがかということをお願いします。

○大西座長 どうでしょうか。

○阿部委員 最初の特区の話ですけれども、実は幸福部会の方でも格差の現状やいろいろな話が出ている中でも、特区構想、モデル地域みたいなものが必要ではないかという議論もかなり多くの委員が言っていると思います。地域を選ぶことによって、それが格差を拡大させる方向になってはいけないと思いつつ、地域間の格差と個人間の格差もありますが、地域間の格差を縮小させる政策も同時に打っていかねばいながら、モデル地域みたいなものは必要ではないかという議論が出ているので、途中段階として特区構想があるというのは、部会としてはそれほど違和感がないのではないかと思います。

○永久事務局長 最終報告に向けて、できるもの、できないものみたいな感じでやっていったらどうかと思います。例えば平和部会で、特区で何ができるかと言っても、なかなか具体的には考えられないですね。そうしたモデル地区みたいなものは、具体的にどういうプロセスで何ができるのか、みたいなことを改めて考えないと難しいのかなと思っていますけれども、こういうものをやったらどうだという提案だけは中間報告で書いてみたいと思います。

○大西座長 議論の中で英語公用語特区とか、そういうのが出たとか、こういうのをずっ

と考えていくと一つのゴールはルールメイキングになって、何がネックかということ日本語が国際語でないということですね。

○阿部委員 私たちの議論で出たのは、むしろこのごろは iPhone でも同時通訳をできるようになってきていますので、2050年にはそれほど英語がネックにならないという議論が出ました。それよりもリーダーシップを発揮できる人材や国際ルールメイキングできるような人材をつくっていく方が重要なのではないか。言語だけが問題ではないのではないか。

○上村委員 創造力と表現力とか、叡智部会と同じようなことを考えていると思います。

○阿部委員 叡智部会の編集力とも同じかと思います。

○大西座長 編集力は普遍的なものではないですね。つまり、だれもが持っているものではなくて、あるグループが持っている編集力が世界を支配しているとか、そういう関係もあると思います。iPhone が言わば、言語を超えて平等化するとは必ずしも言えないように、そこは論点の一つですね。

○柳川委員 繁栄部会では、英語はある意味で当然で、むしろもっと多言語化で英語と中国語と日本語とか、もっとそのくらいのことできないとだめだろうという議論が出ているのと、これは部会で出ている話ではなくて、個人的な感想ですが、教育と言ったときに、日本国民全体が英語をどの程度できるべきかという話と、ルールメイキングで国際交渉に行くとダイレクトにルールをつくっていくときの交渉をする英語能力がどれだけ必要かというのは、先生はよく御存じのとおり、かなりレベルの違う話だと思います。

そうすると、英語だけではなくて、英語圏の文化とか、どういう口調で喋るとうまく交渉ができるとか、そういうものも含めた英語力だと思います。この辺りはもしかすると特区的なところで、かなり高度な英語能力を身に付ける。国際的なルールメイキングに必要な言語能力みたいなことを身に付けるようなことも戦略的にはやってもいいのかもしれないし、その話と国民全般の話は幾つかのレベルで分けて考える必要が本当はあるのかなと思います。

○古川国家戦略担当大臣 私は英語は大事だと思います。言語の壁というのは、自動翻訳機とかいろいろなものが出てきて、ある程度は超えられる部分があるのではないかと思います。交渉力において根本的に大事な部分は最後は人間力というか、人間としてこの人間が信用に足る人間かどうかということだと思います。どんなに巧みな言葉遣いをしたって、信用できない人間とは交渉はできないと思います。

では、どういう人間が人間として信用されるかということ、叡智部会の報告の中で、度量、異なるものを受け入れる力とありました。私自身もアメリカなどに行った自分の経験からしてみると、日本人に欠けているというか、意識にない部分は、自らのアイデンティティというものをしっかり考えることではないかと思います。

日本人が外に対して非常に警戒的になるのは、例えばイスラム教の人とか物すごく強いアイデンティティを持っているわけですが、そういう強いアイデンティティを持っている人に来られると、自分のアイデンティティがあいまいで自信がないため、本能的に拒絶し

ようとしてしまう。私がニューヨークに住んでいてわかったのは、ニューヨークはみんなアイデンティティの塊みたいな人たちの中で、自分のものをしっかり持っている人は、違うものと相対しても別に恐れることもないし、自分に自信を持って交渉ができるということです。

大事なことは、自らのアイデンティティをしっかり確立することではないかと思っています。逆に言うと、そういうしっかりしたアイデンティティを確立している人間であれば、交渉相手もこの人間と交渉できると思います。言葉が巧みかとか、そういう話ではなくて、その裏にある人間力というか、国力の源泉はそこではないかと思っています。そういう人をどうつくり上げるか。せっかくいろいろな方々に集まっていたいるので、表面的なスキルとかタクティクスよりも、もうちょっとその根本にあるところを考えて提言をしていただけるといいなと思います。

英語公用化とか、そういう話は小渕政権のときにも出ていたりしています。タクティクスがあってもいいのですが、私としてはその奥にあるところまで踏み込んでいただけるとありがたいと思っています。その辺は叡智部会に果たしていただく役割は大きいのではないかと思います。

○大西座長 どうでしょうか。

○隠岐委員 フランスの南仏の大学で日本のことを研究している修士の学生のためのセミナーをやる長期国外滞在からちょうど帰ってきたところです。そこで思ったことですが、政治的な交渉と学術とは少し違うと思いますが、コミュニケーションがすごく大事だということです。人間力という話と、自分が属している文化を高めから見直すというか、つまり、ある程度客観化する能力みたいなものを両方持っている強いのではないかと思います。つまり、私は日本人だ、だからすばらしいんだとやってしまうと、相手はむしろ聞かないと思うのです。そうではなくて、現地だとフランス人で日本のことを研究している人が結構いて、その話を聞いて、うまく学問として対等に議論できるということがあると話が割と伝わると思いました。外から日本を見た人が話す日本というのは、こちらがぎょっとするようなことを言ったりするわけです。そういうのを受け入れて、かつ、それに対して、でもちょっと違うと思うと言うことがすごく大事だと思っています。更に政治ですと、もっと気迫というか、人間力が問われるのだらうなと思いますが。

結論を言いますと、私自身は言語は余り大事だと思っていません。学習はやはり重要ですが、交渉となると、もっと精神力とある種の理知的な理性の働きというところかなと思っています。

以上です。

○古川国家戦略担当大臣 隠岐さんがおっしゃる、自分は日本人だからと言う人は、日本人が何というものをわかっていないと思います。私自身もある意味でそういう経験をしてから、留学中や留学から帰ってきてからずっと考えているのですが、日本とは何なのか、日本人は何なのかと、これまで自分自身でそれなりに勉強したりとか、聞いたりとか、探

っているんです。それでも今でも日本人とか日本は何なのか、自分自身でわかったとも言えないと思っています。

しかし、そういうことを考えていくと、いろいろと見えてくるものがあります。日本人は生まれたときから島国ということもあって、同質的であり、日本に生まれるイコール日本人ということで、その場に生まれただけで日本人かのような感じがありますけれども、ほかの国の人だと、何々人というときは、自分のアイデンティティを宗教であるとか文化であるとか、ものすごく突き詰めている部分があるのです。

グローバル化した時代の中では、そういうことが日本人も必要とされてきているのではないか。そういうものがあると、ほかの国の人と話をするとき、上から見るというわけではなくて、客観的にちゃんと話ができることにつながるのではないかと思います。是非そういうところを皆さんのお考えに含めていただけるといいなと思います。

○大西座長 柳川委員、阿部委員、どうぞ。

○柳川委員 今、大臣がおっしゃった点が一つのポイントかと思います。自分のアイデンティティというのは、自分の持っているアイデンティティと違う人に接して、初めて気づくのだと思います。同じアイデンティティを持っている人といると、自分の本当のアイデンティティは何かを実感できないのですが、違うアイデンティティの人と積極的に接することでもって、自分はこれだとわかる。そういうことを早いうちに経験するということが、自分はこれだということを突き詰めて考えるということになるのではないかと思います。最初の大臣の御質問ですけれども、そういう環境なり教育環境をつくっていくことが一つのポイントではないかと思います。

○阿部委員 ちょうど今日、幸福部会の委員の一人とお話しさせていただいたのですが、その委員からは、コミュニケーションについて、私たちが学ばさせていただいております。

結局のところは、人間力や交渉力というものは、まとめればコミュニケーション力だとは思いますが、その委員がおっしゃるのは、それは聞く力だと。相手の立場に立って物を見る力で、ダイアログできることで、ディベートできることではないとおっしゃっていました。そういう力を育む教育というのは、実際のところは今は国際交渉どころか、日本語同士の会話でもなかなかできていないという現実があって、それを育む教育が必要ではないかということで、公教育の改革というところで先ほど申し上げた、それができない一番大きな要因は、それを教えられる先生がいない。

教員の養成課程で教えなければいけないということを話しておりまして、特に今の日本の教員の養成課程の中では、ほとんどが講義タイプの授業であって、先生自体、そういうことに慣れていないような授業で先生にそのままなってしまう。ダイアログを教えられる先生の教育課程を改革するということと、あとはよりいろいろな人たちが教員になれる状況になって、一番過激なアイデアでは、教員免許の制度を撤廃してしまっ、だれでも地域の人であったり、社会人であったり、会社の人であったり、大学の先生だったり、いろいろな方が教えることができるような小中学校から改革をしていくべきではないかという

ような議論をしております。

今この話に出ていることは今までも言われていたことで、コミュニケーション能力を高めなければいけないということですが、それをやるためには何が必要かと言ったときに、政策のところまで是非この報告書の中では書かせていただきたいと思っております、教育の部分はすべての部会が関わってくるかと思しますので、是非皆さんからもお知恵をいただきたいと思っております。

○大西座長 いずれにしても今の教育とか国際化というのは、全体に共通する一つのテーマですね。今まで精密な製品をつくって、それが世界に買われて富の源泉になったとすれば、日本はそれだけではこれからはやっていけないというのは間違いないので、日本が次に何を特質として世界の中で存在していくのかというのはすごく大きなテーマで、そこに関係してくるテーマだと思います。ですから、是非掘り下げて、それぞれの部会で議論していただいて厚みを出す。その象徴的な言葉として、ルールメイキングなどにつながっていくと深みが出ると思います。

取り上げなくてもいいかもしれませんが、東大でも秋入学ということを出したので、それが大学の国際化ということをめぐる議論になっていく可能性があると思います。秋か春かということだけで議論をしているのは、なかなか矮小な感じですが、そこにいろいろなものを膨らませていくと、日本の大学がどうあるべきかというのは、かなり深い議論になると思います。そのことを取り上げる必要はないのかもしれないですが、そういうことにみんなが関心を持ってきているということも踏まえて、是非深めていただければと思います。

どうぞ。

○小林座長代理 日本の倫理とか道徳がどうやったら世界に通じるかどうか。それが試されているというお話がありましたけれども、資料5はすごくよくできていて、横軸のところはそのとおりだと思いますが、国際化が進むとか、若い世代をもっと活躍させなければいけないとか、場所・時間にとらわれない多様な社会をつくるというのは、そのとおりだと思います。

最後の「日本の強み・個性を生かす」という部分が、そうなんだけれども、強み・個性は何なんだろうというところが余り解明されていないのかなど。その議論をもっとしろというのが、先ほどの座長のお話だったのかなと思います。そういう意味で見ますと、その辺の議論が非常によく出てきたと思います。

強いて言えば、今日の部会からのプレゼンテーションにもありましたけれども、例えばつながりを重んじることとか、絆とか、そういうのは恐らくここに属しているのではないかという感じがします。例えば私みたいに環境屋から言いますと、日本人はもったいないと言って物にこだわってしまったりしますね。それは結局そういうつながりだったり、気配りだったりするのだと思います。特殊な関係にあるのが日本の社会だと思います。それから、全体の利益を重んじるとか、そういうところが日本の強みもしくは、アイデンティ

ティなのかもしれないと思います。そこが入ってくると、ここがすごく光ってきて、答えが出てくるのではないかと先ほどの議論を聞いていて思いました。

各論になってしまいますが、叡智部会ですごくおもしろいなと思った議論として、知識、文化と市場との関係はものすごく大事だと思います。座長がおっしゃったとおりですが、何を売っていくかという際に、日本の知恵がお金を生まないといけないのだと思います。

まずはそういう知恵について、対価をちゃんと払う社会にしていけないといけないのかなと思います。日本はあまり知恵にお金を払わない社会なのではないかと思うので、その辺もパッケージにして、どういう知恵かがコンテンツだと思いますが、そういう知恵がちゃんと評価されて、お金になるという道具立ても要るのかなと思いました。そういう特区があるかどうか知りませんが、コンテンツとそれを生かすための仕組みと両方がとても大事ではないかと、併せて聞いていたときに思った印象であります。

○大西座長 どうぞ。

○苅部委員 いろいろと御意見をいただきましたけれども、実は日本の伝統文化とか伝統道徳がどうかという話は、この叡智では最も弱いところで、専門家は私一人なんです。実を言うと、この交流、編集、度量と3点にまとめたのは、実は伝統的な知恵の中から基盤が見出せるのではないかということも考えてつくりました。

これまで少なくとも日本という国は、他から文化を輸入して国を保ってきたわけで、そのこと自体はむしろ一種のアイデンティティとして、もっと打ち出しているんです。それが今、組織の中に閉じこもった編集能力に限定されてしまって、もう少しダイナミックに物事を組み換えする方向になっていないのはなぜなのか。そうしたら、それは度量みたいなものをもう少し詰めなければいけないとか、あるいは外との交流を開かなければいけないとか、そのような形で考えたからです。

むしろ、そういう知恵の在り方を考えることと同時に、どこを伸ばせばいいかというやり方を考えることが、我々がアイデンティティを新しく見出すことなのだというつもりでプレゼンテーションをしていった方がいいと思います。

学問的にどんどん言っていくと、要するに幾らでも反対をする者が日本文化には出てくるのです。日本人は訴訟が嫌いだというが、実際に江戸時代の人はやたら公事訴訟をやっていました。そんなことを言い始めたらまとまらなくなるので、むしろ現状を見て、どこを伸ばしていくか。ポイントを立てるときにある種の伝統文化みたいなのところに基盤があるんだという形で再構成をしていく。そのことが大事だと思います。

そのつもりでやっていくのが一番いいのではないかと思います。そこがなくて、ただ単に最初からアイデンティティだけで言うと、単に富士山があればいいのか、俳句を読めばいいとか、そちらの方になってしまいますので、そうならないような形でまとめたいと思っています。

○大西座長 どうぞ。

○上村委員 今、叡智部会の資料についての話があったので、お聞きしたいのですけれど

も、資料3の「4 知識・文化と、市場との関係」ということで、一番最初に「多様な知の結節点としての『家』」とありますが、この『家』というのはどういう意味でしょうか。

○荻部委員 これは前に分科会で少し言いましたが、ハウスです。家というものを我々は歴史的につくってきた。それはさまざまな技術をいろいろな分野で新しく発展させるきっかけになった一つの集合体なんですね。そういう家を総合的につくっていくような知恵みたいなものをもう一回見直してみる可能性があるのではないかがある委員が言っていて、それを取ってきました。さっき言ったような編集する力みたいなものを具体的に技術開発に結び付けるポイントとして、この家というのは考えられるのではないか。そういう議論です。

○上村委員 例えば多くの人々が交流する場とは違いますか。

○荻部委員 そういうことではないです。ファミリーとかホームではなくて、具体的な物としてのハウスです。ただ、それが交流する場をつくっていくという意味で関係があるかもしれないですね。そういうことにつながってくる可能性も勿論あると思うので、むしろそこが面白いなと思って、ピックアップして組入れた次第です。

○上村委員 一つの報告書をつくる時に、それぞれのワードがどういう関係を持っているのが難しくなってくる気がします。叡智部会では「家」、幸福部会では「場」という言葉を使っています。この「家」と「場」の関係がどうなっているかというのが気になったのです。

○荻部委員 一方で、疑似家族と言っているときに、他方で家とか言われると困るということもあるでしょうね。その辺は少し考えます。

○大西座長 多分、今の感じだと、上村さんが言っている「場」と荻部さんが言っている「家」というのは、似たものかなと思います。そこで展開される機能を包み込んでいるある種の装置とか、そういうことだろうと思います。ただ、どういう表現を使うか。そういうのも、まとめるときに整理をしなければいけないですね。

○永久事務局長 中間報告の段階でそこまでできるかどうかは、なかなか厳しい話かと思えます。最後までには、そういうところをうまく刷り合わせないといけないかと思えます。

○大西座長 永久さんの連休中の仕事になると。

○永久事務局長 覚悟しております。

○大西座長 ほかに何か論点がありましたら、どうぞ。

○古川国家戦略担当大臣 私はこういう話が好きなものですから、あまり言うてはいけないのかもしれませんが、是非皆さんの頭に入れておいていただきたいと思えます。荻部先生がおっしゃった日本の伝統文化の中の力や、今、日本が直面しているの見直さなければいけない部分は、そういうところではないかと私も思っています。

私なりの考えで、むしろ教えていただきたいところですが、アメリカだと、巨木があって、風が来ようと嵐が来ようと倒れないみたいな、そういう鉄板のような、鋼のような強さがある。私は、日本の強さ、度量は竹のようなしなやかな強さではないかと思えます。

イチローなどのバッティングは常に形が決まっているのではなくて、しなやかに状況に柔軟に反応しながら変わっていくけれども、最後はちゃんと戻る。竹はそういう意味では非常に強いですが、一方で風が来るとしなったり、しかし、また戻ってくる。

日本の文化、日本の強さはそういう竹のような強さ。ああいうしなやかで強靱な強さが本来の日本の強さなのではないかと思います。それだからこそ、異文化に接していきながらも、それに染まるのではなくて、それを自分なりに評価して、いわば日本文化とかそういうものをつくり上げてきたという歴史があったのではないかと思います。

もう一つは、実はこれは日本再生の基本戦略の中で書かせていただいたのですが、物事は常に二面性がある。例えば晴れと卦であるとか、国の仕組みで言えば、天皇制というものがあ、一方で実質的な政治権力はまた別にあるという二元的な仕組みであるとか、常にそういう一面で何が前というだけにしてしまうのではなくて、差別部落とか部落民をつくりながらも、こういうところから歌舞伎者とか文化を担っていく人たちは出てきて、その人たちがずっと日陰ではなくて、その人たちはその人たちの社会の中に役割があるとか、常に一面的に全部真っ白に塗るとか、真っ黒に塗るとかいう話ではなくて、白い部分があったり、黒い部分があったり、そこをうまく両方を共生させるような、そういう社会だったからこそ、今まで続いてきたのではないか。

デュアルな生き方のできる国にしていったらどうか。都会で出ているグローバルに世界の人と闘うという道を選ぶ人がいてもいいし、一方で田舎の方でスローライフで自給自足的な生活をする人がいてもいい。どちらかを目指すのではなくて、両方を選択できる。かつ、その両方を行ったり来たりできる。一度こちらに入ってしまったら、永久にこちらでいかなければいけないのではなくて、例えば疲れたときには地方に行ってもいい。あるいはこちらでやっているけど退屈になったから、やってみようか、そういう行ったり来たりができる。それが強さにもつながるのではないか。日本再生戦略の中では、そういうデュアルな生き方のできるような国の在り方で、都会と都市と地方との在り方、そういうものを考えていったらどうかということを考えています。

最終的にわかりやすい言葉で一言で言うと、みんなに居場所と出番がある。民主党政権では鳩山政権以来、居場所と出番のある社会をつくっていきましようとして取り組んできました。人々に居場所と出番を与えるには、今みたいなそういう柔構造で選択肢があって、いろいろな道が選べる。それが一度入ったらそれだけではなくて、また変われる。そういう転換性があるような社会がみんなに居場所と出番を与えることにつながるのではないか。そういう議論をしていて、日本再生戦略は今後まとめていくのですが、そういう考え方もあるというところで、皆さんにも御理解をいただければと思ひまして、余計なことですけども、申し上げました。

○大西座長 今おっしゃるようなものは、流動性というのがキーワードの中でも出ていますね。

○上村委員 幸福部会でもそういう議論はかなり活発にされています。ですので、関係性

を非常に重視しているし、かつ、そういう場が複数ある方がいいということの議論をされていますので、カバーしていると思います。

○大西座長 武田委員、どうぞ。

○武田委員 もしかして重なっているかもしれませんが、しなやかさという意味では、やはり繁栄部会でも柔軟な働き方ということで、かなり話に出ています。ただ、そのときに必要なのが、産業という点でもそうですし、雇用という観点でも、本来なら日本の強さだった竹のようなしなやかな構造が、この数十年で硬直的になっていた部分があるので、そこをもう少し、また元のような強さ。つまり、しなやかで柔軟な生き方、多様な生き方が選択できるような仕組みに経済、産業の面でも、雇用制度の面でも、教育の機会という意味でも、22歳で終わりとかいうわけではなくて、生涯を通じて選択できるような機会を与えられるような社会にしたかどうかという議論を繁栄部会ではしております。

○大西座長 神様がたくさんいる社会は、その竹のようなんでしょうね。

○荻部委員 現状で言うと、大臣がおっしゃったデュアルな生き方を往復するというのが今、日本では一番苦手になっている。往復ができなくて、一つの場所に閉じこもる傾向が強くなっているものだから、しなやかな強さがしなやかな弱さになってしまっているのです。

つまり、その場の中でお互いに気を使うことに柔軟に対応をする。そこからもうちょっと変えなければいけないのは、さまざまな生き方を選べる。選んでもう一回やり直しができるというのがスタンダードになっていくことが大事だと思います。

○大西座長 どうぞ。

○柳川委員 部会の議論は今、武田委員がおっしゃったとおりですけれども、ともすると日本的経営とか日本的システムは、どちらかというとおっしゃるように柔軟性の弱さのような話になってくるので、我々の部会の方では、これからの繁栄のためにはしなやかでデュアルな仕組みがいいということになっています。さっき大臣がおっしゃったように、もし叡智部会で、昔から実は日本的な強さというのはそういうところだったんだというのが出てくると、うまく過去の話と未来の話とが結び付いて、こういうことを目指すべきなのだと両方で説得力が出てくるのかなと。今お話を伺って、勝手なお願いですけれども、そういう方法があれば、うまくつながるといいかなと思います。

○永久事務局長 デュアルというと2つだけなので、2つにこだわる必要はないのではないかと考えていて、たまたま土曜日に和田中の校長をやっていた藤原さんの講演を自分の田舎で聞くチャンスがあったのですが、そこでは坂の上の坂と言っていましたけれども、一つの山を越えたら終わりだった人生ではなくて、幾つも山があると。その山の裾野は1つの山を登っている最中にある。デュアルというよりもトリプルというか、クワトロというか、そういうような状況で人生を歩んでいかなければだめだ、みたいなことをおっしゃっていました。デュアルではなくて、もう少し多様性があってもいいのかなと思いました。

○大西座長 せっかくですので、岩田議員。

○岩田国家戦略会議委員 2つほど言わせていただきたいと思います。今の叡智部会の話ですが、ギリシャではモラルティといいますか、神前美というのがいいことです。キリスト教の国は神の息吹に触れることが最高にいいことだと思っているが、日本はどういうときに一番いいと思うかということが議論されたように思います。

このまとめで言うと、美意識といいますか、外国人でも日本は清潔な国だという印象を非常に持っておられる。環境問題を日本はかなりうまくコントロールしてきた。まだ課題は残っていますが、それは美しい自然とか美しいものを残したいという、その美意識が裏にあるのかなと思います。非常に繊細な技術ですが、それも日本人が持っている美意識とどこか結び付いていて、それがあある意味の国際競争力にも同時になっていると思います。

美も陰と陽があって、西洋は全部見えるものだけが美しい。しかし、日本は東洋と一緒にかもしれないですが、見えないものどこかに美しいものがある。これは人の生き方についても同じで、ある人を見るときに外だけで判断するのではなくて、中といいますか、見えない世界でその人は何をやっているかということまで考えるところが日本のいいところではないかというのが1点。

もう一つは繁栄部会について、移民の問題をどう考えるかというのはものすごく大きな決断で、それをどうするかで2050年の姿は相当違うのではないかと考えています。1つは、生産年齢人口比率が今のままだと、どう考えても無限に小さくなっていきます。無限に小さくなっていくままでは、いかなる社会保障制度も持たないと思っているのですが、それをどこかで安定化させる仕組みが必要で、アメリカは明らかにそうならないように移民政策で、人口を1%くらい増やしており、そういうやり方もあります。

しかし、そうでないやり方も勿論あるかもしれないので、その2つのやり方でどんな違いが出るのか。つまり、移民を受け入れた場合とそうでない場合。移民と言っても私は企業自身がものすごくグローバルになっているので、あまり人口的に考えなくても、自動的に日本の企業はたくさんの外国人を雇って、その方々が日本で働くようになったりすると、自動的に増える部分も相当あるように思っています。

社会保障制度も実は財政の関係で言うと、2060年に今のデットのレベルとGDP比率と同じように保つためにはどうしたらいいか。これはいろいろな計算の仕方がありますが、足下で消費税を25%くらいに上げないと、2060年の時点で今と同じようなことにはならない。これは確かめ方がいろいろありますが、それはおそらくほとんど不可能に近い。そういう意味で言うと、日本は財政で言うと出口なしのところまで来ているのではないかと思います。

以上です。

○大西座長 ありがとうございます。

まだ議論が尽きない感じがありますけれども、予定の時間になりましたので、今月はあと2ラウンドくらいあります。部会は部会としてこなしていただきつつ、まとめに入ってくださいという無理をお願いすることになりますが、よろしくお願ひします。各部会の案

をいただいた後、全体を眺めて、今日出たような議論を踏まえた方向性をより確かなものにしていきたいと思います。

それでは、最後に古川大臣にごあいさつをいただきたいと思います。

○古川国家戦略担当大臣 本日は活発に御議論をいただきまして、ありがとうございました。今日の皆様のお話を伺っていると、ついつい私も話をしてしまったのですが、できれば本当に私もすべての部会に出て、お話を伺いたいなと改めて思いましたし、永久さんは全部出て、うらやましいなと思ったりもしましたが、これをまとめるとなると非常に大変なことだなと思っています。

これからまさにこれだけ深いところまで御議論をいただいているのをまとめていただけるわけですので、大変御苦労があるかと思いますが、座長、座長代理、事務局長を中心に、ここにいらっしゃる部会長、部会長代理の皆様方は大変恐縮でございますが、御尽力をいただいて、とりまとめをいただければと思っています。

そして、ここからまとまるものが本当に日本人にとって、まず目を見開かせるものになってもらいたいと思いますし、世界に対してもメッセージの発信になるようなものにしていきたいなと思います。今日の議論を聞いていると、大変期待ができるのではないかと岩田委員も思われたのではないかと思いますので、是非引き続き御尽力をいただきますようによろしくお願い申し上げます。どうもありがとうございました。

○大西座長 今日は大串政務官にも御出席をいただいています。もし何か一言あれば。

○大串政務官 もう大臣が言われた後ですから、議論はしっかりと私たちもフォローアップをさせていただきますので、よろしく申し上げます。

○大西座長 皆さん、どうもありがとうございました。

それでは、本日の第3回フロンティア分科会の議論はここまでといたします。次回の日程については5月で調整しているということですので、連休明けに各部会からお出しいただいた案をメールベースでやり取りして整理をして、ある程度の形ができた段階で次の会を開くという格好にしたいと思います。それまでにいろいろと連絡はさせていただくことになると思いますので、よろしくお願いたします。

今日は以上ということで、どうもありがとうございました。

(終了時刻 19 時 44 分)